

作用がなければ我々の認識する現実世界が成り立つことはないであろう。言い換えれば、全ての認識し得る自然現象は、作用の与奪によって存在するというのが言えるのである。このことにより、作用とは有為法が現在するためにはなくてはならない概念であることから、先に述べた物理学のエネルギーと似た概念に相当するのではないだろうか。

本論考では、サンスクリット原典の残存する『俱舍論』をもとに、玄奘が解釈した「作用」が現代科学にいうエネルギーと似た概念に相当するかどうかということを検討した。その結果、玄奘訳の「作用」には、(1)法体が起こりくること(*AKBh.* p. 13, l. 16)、(2)行為を為すこと、実行すること、生ずること(*AKBh.* p. 28, ll. 20-21)、(3)為す、行う、執行すること(*AKBh.* p. 31, ll. 11-13)、(4)行動、仕事(*AKBh.* p. 60, l. 23-p. 61, l. 1)、(5)差別の因を建立するもの(*AKBh.* p. 63, ll. 14-16)、(6)因果関係を誘発するもの、(7)三世を規定するもの(*AKBh.* p. 296, l. 6-p. 297)といった定義があることをまとめた。

また、色法、心法、心所法、心不相応行法において作用という言葉が使われているが、無為法においては使われていなかった。

以上のことから、『俱舍論』における玄奘訳からの理解において、「作用」とは無為法を除く全ての現象において共通する性質であり、作用があるから認識世界が成り立つといった、現代物理学のエネルギーの概念に似た、極めて根幹的なものであることが分かった。

東南アジア撰述仏典の特質

茨田 通俊

東南アジア各地には、現地地撰述された上座部仏教の古写本が数多く存在する。古写本は、ヤシの葉を乾燥させた貝葉写本が一般的であるが、タイ中部地域の貝葉写本については、中心都市アユタヤが、十八世紀後半のビルマ軍の攻撃によって壊滅したために、そこに残存する写本群は皆無に等しく、一部が当時栄えた周辺地域の寺院で長く秘蔵されて来ただけで、実態はほとんど知られていなかった。

一方タイ中部地域には、サムットコーイと呼ばれる桑科の木から作られた折本紙写本も伝わっている。田辺和子博士が現地の寺院で撮影を許可された折本紙写本は、クメール文字パーリ語あるいはタイ語で表記されたもので、所々に鮮やかな挿絵が描かれているのが特徴的である。(田辺和子「アユタヤ期後期からラタナコーシン期初期作成の絵付折本紙写本絵解き(仏伝中心)と経文解説」、『パーリ学仏教文化学』第二十四号、二〇一〇、九三頁以降参照)。この絵入りの折本紙写本もタイに現存するものは数少なく、中でもアユタヤ期のものはごくわずかとされる。

ここでは、*Mahābuddhagunavanana* と称する仏徳の讃嘆に関する叙述や、アビダンマ七論への言及が多く見られる(田辺和子「アユタヤ期後期からバンコク期初期に書かれた絵入り折本紙写本の解説―クメール文字パーリ語表記の仏典写

本を中心にして―』、『パーリ学仏教文化学』第二十三号、二〇〇九、九一頁）。アユタヤー期のもので特定できる Wat Hua Krabu（バンロク）、Wat Lat（ペトブリー）の二写本、それにフランス極東学院（EFEO）所蔵写本（EFEO PALI 40）を対照しながら、全体の中で最大量を占める Mahābuddha-guṇavajjanā の部分について、現在解読を進めている。

それによると、まず東南アジア地方独特の表記（例 saṇḍā を saṇḍā と表記等）はともかくとして、パーリ語の荒れは否めず、解読の困難な箇所が多い。また、写本ごとに言及する事柄の序列に異同があつて、仏徳の讃嘆の形を体系的に捉えることを難しくしている。さらにこれらの写本は、死者の供養のための施本とされ（田辺和子前掲論文二〇〇九、七四頁）、当時の葬送の状況や死生観について貴重な資料を提示するものだろうが、仏徳の讃嘆からアビダンマ七論に至る階梯をどう理解するかは、今後の研究を待たねばならない。

東南アジア撰述文献として、これまで先行して取り組んで来た『パンニヤーサジャータカ』（拙稿「パンニヤーサジャータカについて」、『宗教研究』第七十七巻第四輯、二四七―二四八頁、同「パンニヤーサジャータカ研究の課題」、『同』第七十九巻第四輯、二四七―二四八頁、同「パンニヤーサジャータカ研究の意義」、『同』第八十三巻第四輯、三九三―三九四頁等参照）は、東南アジア土着の物語を基にしたものが多く、それが本生活の様式を採ること、民衆の仏教化に大きく寄与したと考えられる。一方、ここで取り上げた折本紙写本に見られる内容は、出典をパーリ三藏に求めながら独自の編纂を遂げたも

のであり、実際に葬儀式等の儀礼に用いられることで、民衆に浸透していたと思われる。

東南アジアは、歴史の激動や社会情勢の影響を大きく受けている地域であり、それらが仏教の伝承にも色濃く反映していると言える。東南アジアに独自に伝わる仏典の研究は、近年本格化しつつあるが、忘れてはならないのは、当地に伝承された上座部仏教が、まさに現代に生きた教えとして流布しているという事実である。東南アジア独特のパーリ語を読み解いていく言語上の課題、現地の文化の影響を視野に入れた仏教の解釈、それらは過去の仏教研究の常識を許さないものである。その意味で、研究にはハードルの高い歩みを強いられるが、従来の仏教を巡る文献学のあり方を問い直すことにもなるだろう。

新発見安世高訳『十二門経』における

写本構造上の問題点

洪 鴻 榮

一九九九年に発見された安世高訳『仏説十二門経』『仏説解十二門経』という書写文献は、初期の訳経史を説明するにあたって重要な手がかりになるに違いない。道安の「十二門経序」にある幾つかのキーワード――「三向」、「滅外止鹿」の「外」、「進消内結」の「内」及び「諸仏嘉歎記其成號」の文は、ちょうど『仏説解十二門経』中の「向三」または「三向」、「内」「外」そして「受剎」に該当すると判断できる。つまり、道安